

風暗号

戦争と予報 9

NHKドラマ『エトロフ遙かなり』は千島列島択捉（えとろふ）島、雪の舞う単冠（ひとかつぶ）湾を舞台に日米開戦前夜の緊迫した蝶報戦を鋭くかつ物悲しく描きだしている。単冠湾に集結した日本艦隊は昭和十六年十一月二十六日、ハワイ真珠湾攻撃作戦に向かって姿を消した。

ハワイへの道は奇襲作戦が故に、世界でも最も頻繁に低気圧が通る。猛烈に発達して大シケを呼ぶ『爆弾低気圧』の通り道をあえて作戦経路に選んだ。

この季節、千島列島から東に伸びる北緯四十度線沿いの海域は世界でも有数な危険海域、大シケ遭遇の危険性と洋上補給の困難さで根強い反対論があった。その危さを押し切って隠密行動と情報を秘匿せんがために危険を隠れ蓑に大勝負にでた。

奇襲戦争には天気がつきものだ。川中島の戦いでは朝の川霧を隠れ蓑に上杉軍が武田陣営を奇襲した。桶狭間の戦いでも織田軍が梅雨の豪雨を利して今川軍を急襲した。いかに天気を味方につけて動きを秘せるかが勝負の分かれ目となる。四十度線のすぐ北を東航して十日、まさに幸運にも爆弾低気圧に遭遇せず首尾よく洋上補給も奇襲作戦も成功した。

開戦前夜は日米の蝶報戦も熾烈を極め、情

報戦略の専門家であるR・ウールステッター著『パールハーバー』（読売新聞社）には、こんな話が載っている。通信途絶の際に日本から在外機関に向けて、日米関係が切迫した場合には、『東の風、雨』という『風暗号』を送る。それも短波放送の中でさりげなく天気予報につけて一回繰返して放送するというのである。一方、太平洋戦争へ突入した昭和十六年十二月八日から天気予報は軍事機密扱いとなり放送が禁止され、再び復活したのは敗戦直後の昭和二十年の八月二十二日だった。

最近の湾岸戦争の際にもイラク周辺に空白の天気図が出現した。情報の塊である天気予報はまさに平和のバロメーター、世界の空には国境はない。